
おひさまsummer

詩代 歩溜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おひさまsummer

【Nコード】

N5909Z

【作者名】

詩代 歩溜

【あらすじ】

13回目の夏をむかえようとしていた千歳。いろいろあって、孤独だと感じるが多くなっていたある日のこと。

「ぴーなっつ」

わけのわからない声が聞こえて・・・

プロローグ（前書き）

大切な人と過ごす夏。

1秒でもいいから一緒にいたいんだ。

1秒じゃたりないんだけどね。

ブログ

太陽出てるね。

今日は雨のはずなのに。

天気予報土さん残念。

でも私は嬉しいな。

昨日は「明日は雨なんだ。」ってすごいがっかりだったのに。

今、晴れててこんなに嬉しいのって天気予報を外してくれたおかげじゃないかな。

最初から晴れって分かってたらこんなに嬉しくなかったはず・・・。

天気予報ありがとーう！

まあ、でも、晴れだからって何かあるわけじゃないんだけどね。

お空の上で喜んでるあなたを想って私が勝手に喜んでるだけだよ。

きつと今日はいい日だよ！

ニュースの占いでは最悪だったけどね。

l o s t f a t h e r

「いつてきます。」

その言葉に対しての返事はない。前までは、「いつてらっしゃい。」の声が聞こえないと部屋中捜しまわって家族を見つけて、無理矢理言わせてた。けど今はそんなことしたって時間の無駄。だって誰もいないもん。いつからだろう？お母さんが帰ってこなくなっちゃったの。最初は寂しかった。去年・・・だから、中1までお母さんと一緒に寝てた私が、今はベッドに一人どころか家の中に一人だよ。不安で仕方なかった。ま、それも最初だけ。今は慣れっこさ。そうか、あれは11ヶ月前のこと。

- - -

「お母さん！私、中1になった記念に一人で寝る！」
私は自信満々に言った。それもドヤ顔で。でもお母さんは、
「そつ、これで広々寝れるね。」
と、このひとことしか言わなかった。この時は何とも思わなかったんだ。

3ヶ月後・・・

お父さんが、仕事から帰ってくるなりこう言った。
「転勤が決まった。だから・・・離婚してくれ。」
その時20時で私とお母さんは夕飯を食べていた。お父さんの分もちゃんとあった。

「本気？なんの冗談？今日はエイプリルフルとちやいますよ。」

茶化すように私が言ったらなぜか怒られた。え？え？なんで私怒られたのかな？

「・・・分かった。」

はい？分かった？a l l r i g h t？イヤイヤ、私全然分からない。お母さんは何が分かったの？離婚だよ？離れ離れだよ？訳が分からないよ・・・。

「お母さん！お父さん！なんなの？説明してください。」

私が説明するよう催促すると、お母さんがクリップでつままれたように開きずらそうな唇を開けて説明してくれた。

「あのね、お父さんはね、私たち以外に大切な人がいるんだって。だから、私達は離れなきゃいけないの。一緒にいちゃいけないの。ずっと黙っててごめんね。千歳はお母さんとずっと一緒にいようね。」

え・・・？私はいまだに状況が理解できない。けど、お母さんは泣いている。もう、それだけでただ事じゃないことが分かった。

「お母さん、泣かないで！お父さん！私たち以外に大切な人がいるってどういうこと？」

お父さんは真顔で答えた。

「お父さん、好きな人がいるんだ。でも、お父さんにはお母さんや千歳がいるから・・・。今まで何もなかった。けど、お父さん、福岡に転勤が決まったんだ。それで、その人に、「一緒に住もう。」って言われて。お父さん断れなかった。だから、こんな中途半端はいけないと思って、こうすることに決めたんだ。」

お父さんの言葉を聞いて、なぜか悲しいとか、寂しいとか感じなかった。感じたのは怒りだけ。

「私、13年生きてて、幸せじゃないって感じたことなかった。でも今日初めて感じた。ああ、私、不幸だな。って。こんな父親持ったこと。うつん。そうじゃない。ずっと不安でいっぱいだったお母さんの気持ちに気付けなかったことだよ！この上ない親不孝者になっちゃったんだよ、私。仕方ないよね、お母さんを幸せにできな

った者同士一緒にいたってさ。丁度良かったんだよ。離れることになつて。でも、一緒にしないでよね。お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかったけど、私はこれからお母さんを幸せにしてみせるんだから！」

そう言い放つた私の目にはもう涙が溢れてたことは言うまでもないよね。私が怒りを感じた相手つて、こんな最低なお父さんにじゃなくて、自分自身だったんだね。

お父さんのために用意してあつた夕飯が食べられることなく冷たくなつて、テーブルの上で佇んでた。

数日後

お父さんは家を出て行つた。お金のことはちゃんとするみたい。私にはよく分からなかったけど。

その日も、お父さんがいなくなったこと以外は何も変わらないこの家で、私はお母さんと夕飯を食べた。私の好きな牛丼だった。紅シヨウガたつぷりの。私はいつもなら、夕飯の時に、その日あつた出来事を話したい放題話していた。お母さんはちゃんと聞いてくれるの。でもね、その日は何も話せなかった。お父さんのこと以外の話題がなかったんだ。沈黙が続く。お母さんだから、沈黙しても別に気まずくはないんだけど、なんか落ち付かなくて牛丼の味が分かんなかった。そんな時、お母さんが何か思い出したように話した。

「お父さんがさ、離婚の話を出した時、千歳がお父さんになんか話してたよね。あれね、お母さんすごく嬉しかった。でもね、千歳はひとつだけ間違えてたよ。」「お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかった。」「つて言つたでしょ。あれね、違うよ。」「

「え・・・？」

「お父さんだつてひとつだけかけがえのないものくれたよ。」「

「・・・？」

「千歳だよ。お父さんは千歳をくれたんだよ。ほら、ひとつ幸せくれたよね。」

涙目で話すお母さんの顔を見て、私は大泣きした。さっきまで味のなかった牛丼が、いきなり塩味になった。そんな私を見て、おかあさんはやさしく笑ってた。

-
-
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5909z/>

おひさまsummer

2011年12月19日21時45分発行